

ハーディとバラッドの伝統

—*The Mayor of Casterbridge* 考察(1)—

近藤和子

Abstract

One of the reasons why Thomas Hardy (1840-1928) was so isolated from his contemporary writers is that he was a great lover of ballads. His biography, *The Life of Thomas Hardy*, shows how he was nurtured in a ballad-like atmosphere since his childhood. Consequently, ballad characteristics pervade much of his works. However, few critical writings from the ballad viewpoint have been published until now. This paper focuses on the novel, *The Mayor of Casterbridge* (1886), one of his masterpieces, and attempts to fill in this void by analyzing his inclination to ballads.

The Mayor is the tale of the struggle between the two main characters: Henchard, the country protagonist, and Farfrae. The primitive nature operates on Henchard's instinctive impulses, which lead him to disaster. Hardy creates him as a man of ballad or folk tale quality, accepting a number of ballad characteristics such as "abrupt opening", "narrative lacuna", "ironic coincidence", "parallel", "folklore" and so on. In this sense, he wrote *The Mayor* as a literary "prose-ballad", introducing some novelties into his ballad succession.

In this article, the present writer would like to prove how Hardy owes his imagination and literary success to balladry, examining the resemblance and relationship between *The Mayor* and the traditional ballad world.

はじめに

18世紀初頭に始まったバラッド・リバイバル運動は、T. Percy、W. Wordsworth、S. T. Coleridge、W. Scott へと引き継がれた。さらにバラッ

ドは、ロマン派からヴィクトリア朝の詩人たちに継承されたが、中でもその伝統の影響を最も強く受けたのは Thomas Hardy (1840-1928) (以下、ハーディとする) である。古代王国ウェセックスを舞台に展開される彼の詩、短編、長編小説は膨大な数にのぼり、彼は英文学史上まれにみる多作家である。それらの作品は今日まで、国内外を問わず哲学的分析研究や評論に重点が置かれていて、バラッドとの関係の研究書は皆無で、論文も数えるほどしかない。従って、「ハーディと伝承バラッドの関係」を論考する意義は大きい、と言える。

F. E. Hardy の *The Life of Thomas Hardy* によると、彼が生まれ育ったイギリス南部の Dorset 地方には、まだ中世の佇まいが色濃く残されていて、「村人たちは“living”バラッドを歌い、迷信や魔術などを信じるフォークロアの世界に生きていた。」(Hardy, F. E. 20) と紹介されている。F. B. Pinion は、“... people heard the stories about unusual events that were related in earlier centuries and provided the source material for ballads.” (Pinion 152) と、村にはバラッドの素材が豊富であったと記している。早熟だったハーディは、幼いころから村人たちの語る伝説、近隣で起きた様々な事件、ゴシップなどに異常なまでの興味を示してノートに書き留めたりしていた。有形・無形に拘わらず、古きもの、廃れゆくものに深い愛着を示し、特に消えゆく運命にあった伝承バラッド (以下、バラッドとする) への彼の関心は深かった。作品を創作してゆく過程で、記憶に刻まれた様々なバラッド (ブロードサイド・バラッド¹を含む) に加え、周辺の村人たちから得られた情報が、詩のみならず短編・長編小説の中でも繰り返し、そのモチーフとして織り込まれている。これが彼の作品の多くが同時代の作家たちの作風とは異なる大きな理由の一つである。そのために、批評家たちからは「低俗」とか「古風」などと酷評されたが、彼は意に介することなく、バラッド的作品の創作を続けた。重要なのは、文学の原型としての伝承バラッドの内容や技法が、彼の創作の大きな原点になっていることである。文字もないころに生ま

れたバラッドが何世紀もの間、口承で延々と伝承されてきたのはそのストーリー性にあり、ハーディの作品の大きな特徴の一つと合致する。

バラッドの定義は学者により異なるが、簡単には“A ballad is a folk-song that tells a story with stress on the crucial situation...” (Kittredge xi) とされている。さらに分かり易く“literary ballad”の泰斗 G. Malcolm Laws, Jr. は、“...I am restricting the term (ballad) to verse narratives that tell dramatic stories in conventionalized ways.” (Laws, Jr. xi) と解説している。様式化された方法で、ドラマチックに仕立てられた物語が民衆によって歌(詩)われ伝承されてきたこと、これが最も大きな特徴である。そして、物語が面白くなければ文字もなかった頃から民衆がストーリーを記憶し、何世紀にも亘ってそれらを継承することはできなかった。ハーディは *Life* の中で次のように述べ、物語には読む者と聞く者を魅了するに足る面白さが不可欠であると説く。

A story must be exceptional enough to justify its telling. We tale-tellers are all Ancient Mariners, and none of us is warranted in stopping Wedding Guests ... unless he has something more unusual to relate than the ordinary experience of every average man and woman. (Hardy, F. E. 252)

ハーディの作中人物の性格や状況設定などには理解し難い点がある、と指摘する評者もいる。しかしハーディの意図は別のところにあり、読者を魅了するストーリーを創作するために、現実世界から乖離した面もあるバラッド的世界を受容し、それを創作の原点の一つとしたのである。バラッドの世界に関心が深かった彼の作品のいくつかは、その視点から考察すると、今日まで難解とされてきたそれらの分析や説明が容易に可能になる場合が少なくない。

本稿は、ハーディの主要長編小説の一つ、*The Life and Death of the Mayor of Casterbridge* (1886) (以下、*The Mayor* とする) を取り上げて、

主人公 Henchard の壮絶な生と死の葛藤のドラマをバラッドの観点から論考し、ハーディの創作意図とバラッド的世界を跡付けるのを目的とする。

I

The Mayor は、大判紙「グラフィック」に1886年1月号から同年5月号まで毎週、連載小説として掲載された。読者の興味を繋ぐために毎回、事件や出来事を盛り込む必要があったが、その点が気掛りだったハーディは書き終えた時に、その出来映えについて日記の中で次のように述べている。「この小説はプロットの点では複雑であるが、極めて有機的に首尾一貫していることを評価されるべきである」と不安の中にも自信を覗かせているが、実際には、R. L. Stevenson から称賛の手紙をもらい安堵したようだ。(Hardy, F. E. 179-80)

本作品は全45章で、序章と6局面から構成され、その粗筋は次の通りである。物語の舞台 Casterbridge は、イギリス南部 Dorset 州の実際の町 Dorchester をモデルにしている。主人公 Michael Henchard は一介の干し草刈人で、先ず「恰幅がよく、色は浅黒く、厳しい表情をした男」と大まかな体つきと風貌が紹介される。彼は物語の冒頭、Casterbridge の町外れ Weydon-Priors で、酒の勢いを借りたとは言え、妻を行きずりの水夫に売り飛ばすが、自責の念にかられて21年間の禁酒を誓う。そして18年の空白の後、突如再登場した彼は、Casterbridge の町長になっていた。しかし、激情的な性格と連続して起きる事件や事態は彼を翻弄し続ける。彼を取り巻く主要な脇役たちは、妻 Susan Henchard、娘 Elizabeth-Jane、Scotland から来た若者 Donald Farfrae、Susan を買った水夫 Richard Newson、そして Henchard の愛人 Lucetta Templeman の5人である。彼らの登場または再登場によって、事件と事態が目まぐるしく展開してゆくが、Henchard はそれらに適切に対処できず、最終的に元の干し草刈人に戻り、荒野で自ら死を選ぶ、という悲劇的なストーリーとなっている。

冒頭での衝撃的な「妻競売事件」は、同時代の作家たちの作風とは極めて異質で、読者に唐突感を与えた。この妻売りや後述する“skimmity ride”のような事例はイギリスでは実際に行われていたが²、この書き出しには、ハーディの意図が込められている。“The prologue concentrates into a dramatic scene which has the starkness of a ballad . . .” (Brooks 203) と解説されているように、一つにはプロローグにバラッド特有の不気味な雰囲気を取り入れ、Roman Ruin での火あぶりの刑の話などの後に続く様々なグロテスクな場面への展開の序としての伏線の役割も持たせている。もう一つは、前述の彼の創作技法の基本である、“A story must be exceptional enough to justify its telling.” に則^{のつと}って、“folk custom” を有機的に織り込み、読者（聞く者）を納得させる “worth the telling” な物語にすることである。

バラッドではストーリーに重点が置かれ、さらに物語はいきなり始まるのが常である。これは “abrupt opening” 「突然の幕開け」と呼ばれるバラッドの主要な技法の一つであるが、ハーディが冒頭からバラッドの要素を意図的に用いたのは明らかである。他作品から一例を挙げると、長編小説 *Tess of the d'Urbervilles* (1891) (以下、*Tess* とする) の冒頭でのヒロイン Tess の処女喪失場面である。ベールに包まれた状況描写にも拘わらず、出版当時、轟々たる非難を浴びた。しかしハーディは、この作品も当初から “prose-ballad” としての構想の下に創作する意図があったので、批判に動ずることはなかった。

妻を売り払った Henchard が、翌朝とった行動は驚くべきもので、近くの教会で21年間の禁酒の誓いを立てたのである。(ch. 2) そして続く第3章の幕開けとの間には、実に18年の歳月が流れている。前夫 Henchard を探し求める妻 Susan と娘 Elizabeth-Jane の様子が描写された後、Henchard は第5章で再登場する。驚くべきことに、彼は一介の干し草刈人から Casterbridge の町長に変身して、町の名士たちを招いて豪華な晩餐会を開いていた。この18年の空白の間に、彼の身邊に起こったことや努力の過程は

何一つ語られていない。水夫 Newson に関しても同様で、彼は仕事に出たあと海で遭難したらしい、と Susan に風の便りが届くのみである。(ch. 3) ところが彼は Susan を買った日から20年後、突然 Henchard の前に姿を現し、Henchard が実の娘と信じていた Elizabetsh-Jane は、実は自分の実子であると伝え、父親の立場が逆転する。このようなストーリーの飛躍（空白、省略）は、この作品以外にも *Tess*、*Far from the Madding Crowd* (1874)（以下、*Madding Crowd* とする）、短編小説などにも見られる。これは歌い手（聞き手）に最大限の想像力を発揮させ、楽しむ余地をもたせるバラッドの常套的技法の一つ、“narrative lacuna”「物語の空白、脱落」で、空白の時間内に起こったことは何年に及ぼうと一切、歌われ（語られ）ない。

例えば、伝承バラッド³ “James Harris (The Daemon Lover)” (Child 243F) 「魔性の恋人」は、次のように唐突に始まり、恋人たちの間に7年の空白期間があったことが明かされる。

“O WHERE have you been, my long, long love,
This long seven years and mair?”
“O I’m come to seek my former vows
Ye granted me before.” (1-4)

結婚の約束をした恋人が7年以上待っても帰って来ず、海の向こうで死んだ、という風の便りに女は別の男と結婚して2人の子供を儲ける。そこへ行方不明だった恋人が成功して戻って来て女に結婚を迫るが、実は彼は“corporeal revenant”「肉体をもった亡霊」で、しかも割れた爪を持った悪魔と化していた。そして女を誘い出し、船もろとも海底深く沈めて地獄へ連れ去った、というストーリーである。海に出て遭難したと思われていた男が何年か後に戻ってくる話は、バラッドに頻出するモチーフの一つである。*Madding Crowd* の Troy 軍曹にも適用され、彼は海で溺死したとの噂が立つが、その7年後に戻ってくる。因みに「7」は、バラッド好みの数である。

ストーリーの空白に関連させて、ハーディは「過去」の事柄や事件をプ

ロットの中に巧みに織り込む。“Folklore”の範疇の一つ、バラッドの“supernatural”な要素の中から特に“ghost”に焦点を当てることが多く、しかもその役割に常に重要な意味を持たせている。本作品内の脇役たちの中から、次の4人について例証してみよう。① 粥売りの女 ② Susan ③ Newson ④ Lucetta。先ず①について述べる。物語は夕方の Weydon-Priors の市いちの描写で始まる。不気味な雰囲気いぢが漂うテントの中で粥を売っていたのは“haggish creature”「醜い魔女のような老婆」だった。（“hag”は古語で「女の悪魔、悪霊」を意味し、英方言では“harass”「悩ます」の意味もある。）粥に酒をこっそり混ぜてもらった Henchard は、その勢いと生来の激しい気性も災いして、妻競売事件を起こす。この成行きを目撃していた老婆は、20年後に再登場する。場所は法廷で、彼女は風紀を乱した罪で裁判にかけられ、その時、治安判事を務めていたのは町長の座についていた Henchard だった。“The furmity woman is ... a symbol of that inescapable past which dogs Henchard’s footsteps, a demon that cannot be exorcised.” (Carpenter 107) と解説されるように、突然、再登場した場面で悪霊となってあの妻競売事件を暴露して、彼を破滅の道へと追いやる。(ch. 28)

次に②について述べる。Henchard に見捨てられた Susan は、拾ってくれた Newson が行方不明のまま遭難死したと諦めて、娘と共に元夫を探し始める。ようやく辿りついた Casterbridge で18年間の空白の後、二人の再会（密会）が実現する。時は日没後、場所はローマ時代の遺跡の一つ Maumbury Ring。かつては絞首刑などが行われ“something sinister”な不吉な連想が付きまとう、亡霊が出そうな侘しい場所で、町長とみすばらしい旅の女の密会の場所と状況に相応しい。(ch. 11) やがて頻繁に会うようになった二人の仲は噂的となり、気持ちいぢが晴れない Susan は青白い顔をしていた。“Mrs. Henchard was so pale that the boys called her ‘The Ghost.’” (ch. 13) (イタリック体は筆者) と描写されているように、村の子供たちは二人を見かける度に、彼女を「幽霊」とはやし立てたが、Henchard は不吉

な表情をしたまま何も言わなかった。

次に③の Newson に移ろう。前述のように、彼は20年の空白のあと再登場するが、その様子は次のように描写される。“*The apparition of Newson haunted him* (Henchard). He (Newson) would surely return.” (ch. 42) (イタリック体は筆者) Newson も「過去」から戻って来て Henchard に取り付く「亡霊」の役を果たす。最後に④の Lucetta について記す。落ちぶれた Henchard が、今では町長夫人におさまっている Lucetta と再会したのは、Susan の場合と同じく怪しい雰囲気漂う Maumbury Ring である。ここに現れた Lucetta には次の場面で亡霊のイメージが暗示されている。ある時 Henchard は、彼女からの昔の手紙を宿敵 Farfrae にわざわざ読んで聞かせる。それを立ち聞きしていた彼女は、手紙の中の自分の言葉がまるで亡霊の声のように聞こえて震えあがった。“Her (Lucetta’s) own words greeted her, in Henchard’s voice, like *spirits from the grave*.” (ch. 35) (イタリック体は筆者)

以上、4人の登場人物の“ghost”との関連性について述べたが、全ての「亡霊」は一般に膾炙された超自然界の住人ではなく、過去の行為そのものが時を経て思わぬ「姿」で再登場し、バラッドの“invader”さながらとなって主人公や周囲の人々の人生を狂わせてゆく。“As a man sows, so shall he reap.”「蒔いた種は刈らねばならぬ」という諺や、“nemesis”「因果応報」という言葉に通じるものがある。この「過去の亡霊」⁴⁾は、ハーディの詩のみならず、短・長編小説の中でも度々登場する。行為の大小に拘わらず、人は犯した過去の罪からは逃れられない、という彼独自の観点からの亡霊(悪霊)を登場させ、バラッドの伝統を継承しながらも斬新な“ghost”観を明確に示している。バラッドに類出する“corporeal revenant”は、超自然界の中で生き生きと歌われ(語られ)、歌い手・聞き手を楽しませる。超自然界の住人や事象は前述のように、ハーディの周辺の村人たちの日常生活の中にも生きていて、彼の記憶にも深く刻まれ、老年になってもそれが薄れることはな

かった⁵。本作品には「亡霊」以外にも、“folklore”「民間伝承」の中から伝説、習慣、前兆、迷信などが巧みに織り込まれている。それぞれの場面や状況説明は、幼いころから村人たちと交わり、それらを身近に見聞したハーディだからこそできた描写であり、バラッド的世界を彷彿させる。

II

町長の要職にまで上り詰めた主人公が、何故もとの干し草刈人に戻らねばならなかったのか。それを解明するには、プロットに編み込まれた事件を辿ってゆけば良い。次々に起きる事件や出来事には、“coincidence”「偶然の一致」が大きく関係する。J. W. Beach の言葉を借りれば、この作品は始めから終わりまで“a tissue of coincidence”「偶然の一致の連続」(Beach 34)ということになる。ハーディは、バラッドの特徴の一つを自分の物語技法の一部としたのである。さらにこの「偶然の一致」はそれぞれの事件や出来事で“irony”の様相を帯びているが、バラッドでは“ironical coincidence”は物語に哀感を醸し出す常套手法の一つで、その魅力にもなっている。いくつかの例を挙げてみよう。

先ず、Susan が18年振りに Henchard を垣間見る晩餐会のシーンは、バラッド“Dives and Lazarus”「ダイヴズとラザロ」(Child 56A)に類似の表現がある。

As it fell out upon a day,
 Rich Dives made a feast,
 And he invited all his friends,
 And gentry of the best. (1-4)

金持ちダイヴズの宴会に招待されたのは、友人や家柄の良い紳士たちだけであった。それを目にした貧乏人ラザロは、第2スタンザで“Some meat, some drink, brother Dives, / Bestow upon the poor.”とダイヴズに施しを乞うが、無下に断られるという場面である。町長 Henchard 主催のホテルで

の盛大な晩餐会の客は町の名士たちに限られ、貧しい村人たちは窓の外から中の様子を覗き見るしかなかったが、これは上記の一節に見られるように、宴会には金持ちのみを招待するというバラッドのモチーフと同様である。ホテルの側を通りかかった Susan と Elizabeth-Jane のみすぼらしい姿は、Henchard の誇らしい様子と対照的で哀感を誘う。さらに彼は、その日に偶然出会った旅行中の Scotland 人 Farfrae を一目で気に入り、自分の小麦商の支配人として即座に雇用する。偶然起きたこの日の二つの出来事も Henchard の人生の歯車を狂わせるのに加担し、こうして “ironical coincidence” が連続して起きてゆく。

次にこのバラッドの要素を用いた 4 例を挙げるが、同様な事例は他にもある。① Henchard と Elizabeth-Jane が和解した矢先に Newson が突然現れて、自分が彼女の実父であることを暴露したこと。② 粥売りの老婆と Henchard が、あの妻売り事件から 20 年後に法廷で偶然、顔を合わせたこと。③ Henchard が Elizabeth-Jane と Farfrae の仲を許した時には、Farfrae は既に Lucetta を愛し始めていたこと。④ 使用人の Jopp が雇用主の Henchard を逆恨みして、Henchard と Lucetta が Jersey 島に住んでいた頃の二人の仲を暴露し、それが彼女の、延いては彼の死の要因となってゆくこと。“Above all, the pervasive irony has its origin in balladry.” (Brown 110) と解説されているが、本作品内の “ironical coincidence” の連続は、過剰気味の感を否めない。しかし前述したように、連載小説であったことと、バラッド的世界を展開する為にはそれも許容されよう。

次々に発生する事件や出来事は、登場人物たちに影響を与え、彼らのある者は精神的成長を遂げる。しかしそうでない者もいる。バラッドでは、“coincidence” と “conflict” に関わる登場人物は通常、“changing character” と “unchanging character” に分類され、その大半は後者の “unchanging character” の範疇に入っている。本作品では、“unchanging character” として Henchard、Susan、Elizabeth-Jane と rustics (村人たち)、そして

“changing character”として Farfrae と Lucetta が挙げられる。それぞれの人物の性格を概観してみる。

Henchard の性格は次のように繰り返して示される。彼は「つむじ曲がり、片意地」(chs. 1, 17, 19, 26)、「尊大、傲慢」(chs. 1, 20)、「頑固」(chs. 1, 17, 41)、「激しい気性」(chs. 2, 17, 33)、他に「大胆不敵、陰気、癩癩持ち、移り気、狂暴、卑劣、病的に敏感、衝動的、高圧的、敵意を抱き易い、嫉妬深い、迷信深い」などである。本小説のテーマとしてハーディが掲げた“Character is Fate”を強調するには十分すぎる程の性格描写である。このような特異な精神性に加え、肉体的にも大柄な体格、射るような目、黒く濃い眉毛と髪、がっしりした顎と大きな口をもつ個性的な人物として彼は読者に強い印象を与える。しかし彼の“fate”には、“character”に加え、それをコントロールできない「超自然的な悪意」も作用していることは見逃せない。彼は終始、“unchanging”のまま強烈な自我を貫き通すが、物語が終盤に近付く直前でようやく「忍耐強い、気位が高い」(ch. 43)と道徳にかなった性格付けをされる。それは Elizabeth-Jane と Farfrae の結婚が間近に迫った時のことである。二人の結婚を快く思わなかった彼だが、ここに至って Farfrae に対する以前の本能的な嫌悪感は薄れ、“... he was *not now the Henchard of former days.*” (ch. 42) (イタリック体は筆者)と描写される。結婚式当日、義理の娘にそれまでの冷淡な言動を詫びに行くが、会うことは叶わず打ちのめされるものの、彼には精神的成長が見られる。この土壇場での彼の変化をもって、彼を“changing character”の範疇に入れる必要はない。Henchard は結局、“unchanging character”のままの性格と不運によって悲劇的最期を遂げる。

次に Susan の場合はどうであろうか。彼女は表面上は従順で大人しい性格のような印象を受けるが、実はそうではない。「彼女の日頃の穏やかさの陰には、一瞬の疑いなど笑い飛ばしてしまうほどの、大胆さと怒りも隠されていたのかもしれない」(ch. 2)とあるが、「読者はこれを読み過ごすかも

しれない。彼女はその強かさを最後の瞬間まで持ち続けるのである。」(福岡73) Newson と仮の夫婦になったものの、二人の間に産まれた娘の命名の裏にその思惑が透けて見える。すなわち彼女は Henchard と縊^よりを戻せる日を期待して、Newson との間に産まれた娘に Henchard との間の死んだ娘と同じ名前の Elizabeth-Jane という名を付け、将来、Henchard に実の娘と思い込ませて彼女の庇護をさせることを秘かに願っていたのである。やがて娘に Farfrae との結婚で生活の保障が見込めることが分かり、自分の最期が近づいた時、彼女は遺書の中で初めて娘の素性を明かす。その上書きには「エリザベスの結婚式の当日まで開封しないこと」(ch. 18) と書いた。こうして、夫 Henchard が妻である自分を Newson に売り飛ばした仕打ちのしっぺ返しをしたのである。彼女も強かな “unchanging character” の一人である。

次に Elizabeth-Jane について考察してみる。Farfrae は彼女を“... who (is) so pleasing, thrifty and satisfactory in every way as Elizabeth-Jane?” (ch. 23) と控え目で非の打ち所がない女性だと認めているが、周囲の人々も同様の見方をしている。淡い灰色の思慮深い目をした彼女は、鋭い洞察力と鋭敏な感覚を持ち、冷静に出来事の経過を見つめている。Lucetta に恋人の Farfrae を横取りされた時、さらには Henchard に冷たくあしらわれた時でさえ、事態を客観的に分析できた彼女は、誰に対しても終始一貫して公平な態度を失わない。彼女は、バラッドの “faithful lover” としての役を貫き通し、最終場面で義父 Henchard の死に直面した際も、取り乱すことなく彼の死を見届けた。彼女は常に“... happiness was but the occasional episode in a general drama of pain.” (ch. 45) と捉える女性で、いかなる時にも感情の起伏を表すことはなかった。彼女には、「幸運を喜び過ぎると不幸になる」という “folk belief” が常に意識の底に流れていた。彼女もバラッドの典型的な “unchanging and faithful woman” の一人である。

最後に、見過ごすことのできない重要な存在の “rustics” 「村人たち」に

ついて簡単に記す。彼らは次々に起きる事件や状況をその当事者たちのすぐ側で、また遠くから観察しながら、折に触れ、実に辛口の的確な批評をする。バラッドでは会話体でストーリーが展開してゆくスタイルが多数を占めるが、その中には自然に方言も混じる。本作品の村人たちも互いの会話の中で Dorset 地方の方言を縦横無尽に使っている。安宿の Three Mariners や下層階級の人々の居住地の Mixen Lane での彼らは実に生き生きと描写され、その存在感が強調されている。(chs. 13, 16 など) Henchard が連続して起きる事件や環境にも頑迷さを貫いて変化の兆しすら見せないことに対し、彼らはそれを客観的に批判できる知識を持ち合わせている。自然に身に付いた彼らの常識や言動は、“folklore”の精神が息づく素朴な環境の中で長年にわたって育まれてきたもので、変わることなく子孫に受け継がれてゆく。

次に“changing character”の Lucetta の場合を概観してみる。彼女が初登場したのは、Elizabeth-Jane と偶然、鉢合わせした Susan の墓前であるが、バラッドでは良くある場面設定である。Lucetta の完璧とも言えるほど美しい容姿は Elizabeth-Jane に強い印象を与える。一瞬にして相手を魅了する力を備えている Lucetta は、この時から序々に妖しく危険な“invader”へと変身してゆく。別の場面での彼女は、さらに印象的な姿を見せる。それはパリ風の流行の赤い服（バラッドの中で「赤」は「緑」に次いで多用されている）に“change”して Henchard の訪問を待っていた時のことである。艶めかしい姿勢をして待機していると、ドアがノックされた。しかし入って来たのは当の相手ではなく、意外にも Farfrae であった、という偶然が重なる。Lucetta は Henchard と繕^よりを戻すために Casterbridge にやってきた筈であった。しかし目の前に現れた容姿端麗な Farfrae と正反対の印象の Henchard をこの瞬間に天秤にかけ、Farfrae の方に恋心を“change”するという変わり身の早さをみせる。“I will love him (Farfrae)! ...I won't be a slave to the past—I'll love where I choose!” (ch. 25) と叫んで Henchard を拒絶する。そして Elizabeth-Jane から横取りした Farfrae と密

かに結婚する。(これもバラッドのモチーフの一つで、*Madding Crowd* や短編小説“A Mere Interlude”(1855)にも同様の状況設定がある。) こうして Lucetta は Henchard と Elizabeth-Jane を裏切り、バラッドの典型的な“invader”となって自由奔放に“change”してゆく。

“Changing character”の Farfrae の存在は、Henchard の人生を大きく狂わせてゆく一大要因である。バラッドの故郷、遠い Scotland 出身の彼の名は、スコットランド語で“Far from”を意味する。彼は“a stranger, a young man of remarkably pleasant aspect, ruddy and of a fair countenance, bright-eyed, and slight in build”(ch. 6)と描写されるように、Henchard とは対照的な容姿をもつ。広い世界を見聞するためにアメリカへ行く途中であったが、Henchard の強引な引き止め、“I never expected this.... It’s Providence! Should any one go against it?”(ch. 9)と言って、彼の小麦商の支配人の仕事を引き受け、環境に素早く順応する性質をもつ。恋愛に関しても、控え目で楚々とした Elizabeth-Jane に魅かれていたが、偶然出会った女性的魅力を備えた Lucetta に心変わりする。また品質の悪い小麦を良質なものに改良したり、事業では新しい機械を購入して Henchard を凌ぎ、やがて彼の町長の座まで奪ってゆく。冷静に先を見通し、臨機応変に事態に対処する思考や行動力を持ち合わせて自分の置かれた状況を好転させてゆく。その結果、あらゆる面で Henchard の運命を下降させていった彼も“changing character”の一人である。このように Farfrae は、バラッドにおける“changing character”であり、精神的成長を遂げるというよりも、「変わり身の早さ」という意味合いを強くもつ。

近代小説では精神的な向上や変化を目指せない人物は、評価の対象とはされ難い。“Unchanging character”の Henchard は、近代小説における基準からではなく、バラッドの視点から評価すると理解しやすい。彼は環境と性格と不運に翻弄されながらも、その負の性格を義理の娘 Elizabeth-Jane に去られた後の死の直前まで“change”できなかつた。しかし物語の終盤とは

言え、他者を思い遣る人間性に目覚めた彼の生き方は、読者に圧倒的な共感を与え、ハーディの作品の男性の中でも際立った存在感を示している。

III

本作品は、連続して起きる事件に不本意にも巻き込まれざるを得なかった Henchard の波乱に満ちた生涯の物語である。そのストーリーの流れは実に分かり易い。その理由の一つに、バラッドの“parallelism”の適用が挙げられる。「この技法は修辞学では『並列法』ないしは『対照法』と呼ばれ、人間が本来もっていた原初的な詩的表現の衝動を言う。」(山中、『詩学』47)と定義付けられている。もともと建築家であったハーディは、その知識を無意識に作品の土台作りにかかしている。例えば「対照法」の使用もその一つで、主要人物、場所、状況などを事前に対照的に設定して、その構成に安定感をもたせている。これは、ハーディの他作品にも顕著にみられる技法であるが、本作品の中の用例を挙げてみる。

Henchard vs. Fate が本作品の最も大きなテーマであるが、具体的な対照または並列として、Henchard vs. Farfrae, Elizabeth-Jane vs. Lucetta, Susan vs. Lucetta, Henchard vs. Newson, rural vs. urban など、様々な対比や確執が展開されている。以下、Henchard と Farfrae の場合を詳述し、他の並列ないし対照は簡略な説明に止める。先ず Henchard は前述したように、Farfrae に会った途端に自分とは正反対の容姿と知性を備えた彼に魅かれ、“... You are just *the reverse*—I can see that.” (ch. 7) (イタリック体は筆者)と言ったり、“Farfrae, I like thee well!” (ch. 9)と全幅の信頼を寄せ、アメリカ行きを諦めさせて支配人として雇用する。この契約は、その後の二人を待ちうける運に対照的に作用して行く。それを象徴するような些細な事件から運・不運の分け目の火ぶたが切って落とされる。先ず、町の祭りの日に天候を考慮しなかった Henchard の催しは失敗し、逆に雨除けのテントを張った Farfrae の屋台小屋の方は大盛況のうちに終わった。運命

が下降線を辿り始めた Henchard に代わって、洗練された Farfrae の新しい勢力の勃興の兆しである。

もう一例を挙げよう。ある日、Farfrae は町の広場に“horse-drill”と呼ばれる新型種蒔機を持ち込む。昔ながらの種蒔機を使っていた人々は、目を丸くして驚く。その状況を快く思わなかった Henchard は彼を詰る。この事件は二人の、そして新旧の対照的な事象の交代劇を象徴している。やがて Farfrae は Henchard から町長の座と Lucetta を、さらに Henchard が一縷の望みをかけた Elizabeth-Jane までをも奪う。事ごとくが相反する二人の明暗はさらに分かれ、“Character is Fate...and Farfrae's character was just the *reverse* of Henchard's...” (ch. 17) (イタリック体は筆者) に極言されるように、対照的な二人が設定された物語は実に分りやすい。

次に残りの人物の対照性について考察する。Elizabeth-Jane と Lucetta の人物像は、前述の“changing”または“unchanging”の説明の中で触れたが、Elizabeth-Jane は「純情で天性とも言うべき思慮深さを兼ね備えた大人しい娘」(ch. 14)である。自分の幸せを犠牲にしても、他の人のそれを願う控え目な娘で、「ありとあらゆる感情の印を抑え込んでいる」(ch. 27)と描写され、外見上の派手さも軽薄な人生観も持ち合わせない。それに対して Lucetta は派手でずる賢く利己的で、正反対の性格をもつ。Susan の墓前で偶然 Elizabeth-Jane と出会った裏には、Lucetta の計算があった。それは墓参に見せかけて Elizabeth-Jane と知り合いになり、彼女を利用して Henchard からの求愛を引き出すことであった。また、父親と思っていた彼に冷遇されて家を出た Elizabeth-Jane を自宅に同居させ、彼の訪問を自然のここのように見せかけようとした強かさをもつ。Lucetta は自己の欲望を満たすためには他者を思い遣ることはない。何事も有りのままに受け止め、控え目で地味な Elizabeth-Jane と自己主張が強く派手な Lucetta の対照的な様は明白である。バラッド的観点からの彼女たちの性格分析は、最近の研究による詳細な深層心理に基づく性格分析の評価とは異なることは言うまで

もない。

Susan と Lucetta についてハーディは、「女たちの裏切り」というバラッド特有のモチーフを用いて彼女らを Henchard に復讐させる。Susan 亡き後に Lucetta が登場するために二人が直接に顔を合わせたことはなかったが、その意図も異なり、それぞれが彼に復讐する様は、バラッドの “pararell” に相当する。Susan は彼の暴言にも黙って耐え、挙句の果てに5ギニーで売り飛ばされた恨みを臨終の間際まで持ち続けた。Elizabeth-Jane が Newson の子であることを Henchard に隠し通すことによって、見事に彼に復讐したのである。Lucetta は Henchard との結婚を望んで Jersey 島から Casterbridge まで後を追って来て、彼もその気になっていたが、Farfrae の方に心変わりして、Henchard には内緒で彼と結婚した。Susan と同じように彼を裏切ったのである。(ch. 29)

続いて Henchard と Newson については、Elizabeth-Jane の父親として対照的に位置しつつ、対立関係となる。手離れた娘とようやく^よ縊りを戻せたと思った Henchard の前に、Newson が再び現れた。Susan の死の直前まで娘を自分の子として疑わず、彼なりの愛情を注いできた Henchard は、その時「娘を取られる」と思って、「娘は死んだ」と衝動的に嘘をつくが、すぐにばれる。窮地に立たされた彼は自殺を図るが、それもままならない。やがて、次の記述にあるように、皆が彼から去って行く。“...Elizabeth-Jane would soon be but as a stranger, and worse. Susan, Farfrae, Lucetta, Elizabeth-Jane—all had gone from him, one after one, either by his fault or by his misfortune.” (ch. 41) そして Farfrae と実の娘 Elizabeth-Jane の結婚式で Newson が見せた幸せそうな表情は、Henchard の “complete discomfiture” 「完全な敗北」を意味した。Henchard は “...no longer the man to stand *these reverses* unmoved.” (ch. 44) (イタリック体は筆者) と、その衰れな姿を曝け出す。こうして二人は娘を巡って、それぞれ幸・不幸の対照的な道を辿らざるを得なかった。

Rural vs. urban については old vs. new、または agricultural vs. intellectual とも置き換えられよう。ローマ時代の遺跡が残存し、土着の風習が息づく農村の Casterbridge に、近代的な要素が外部から “invader” として流入する。そこに新旧の世界が相対峙して、新が旧を序々に凌駕し、事態はアイロニカルに展開してゆく。具体的な物としては新式種蒔機の登場が最も象徴的であるが、それぞれを代表する人物としては Henchard と Farfrae である。前者の “unchanging” な頑迷さは、後者の環境に柔軟に “change” して行く聡明さに打ち負かされる。バラッドの “parallelism” の技法を受容することで、ハーディは物語設定を簡潔にし、^ひ延いてはそれが、この物語の力強さにもなっている。

次に “folklore” について簡単に言及する。「これはバラッドに内在するものであるが、決して単なる装飾品ではない。」(Lewis 67) すなわち、物語をさらに奥深いものにする重要な要素である。OED では “the traditional beliefs, legends, and customs, current among the common people” と説明されている。さらに “...much of Hardy’s phraseology is borrowed directly from folklore and folk-custom.” (Davidson 145) と指摘されるように本作品の中にも頻出する事象である。Susan の死に際しての迷信（死者が再び目を開かないように瞼の上に銅貨を置くことや、窓やドアを開けてその魂を外に出すこと）、占い師 “Wide-O” に天気占いを委ねる迷信、憎い相手を呪う時の “waxen image” 「蠟人形炙り」、Maumbury Ring での絞首刑などに纏わる不気味な伝説、不義などを犯した男または女の人形を晒^{ひとがた}しものにする “skimmity ride”⁶ など、拾い出してゆけば枚挙に暇がない。しかしハーディは、これらのバラッド的要素を単にストーリー内での受容に留まらず、プロットと緊密に結びつけている。例えば “skimmity ride” による擲^{ひとがた}は、Henchard と Lucetta 二人の死へと繋がってゆく。自分に似せた人形を見た彼女は気絶し、そのまま息を引き取る。彼の方は、死に場所を求めてさ迷っていた丁度そのとき目にしたのは、川を流れてくる自分の姿をした人形^{ひとがた}で

あった。それは死の“omen”「前兆」を意味し、やがて彼の現実の死へと繋がってゆく。(ch. 45) この事件を境にして、主要人物たちの Casterbridge での生活は、それまでとは異なる方向へと向かってゆく。

Henchard は全てを失って初めて自己の頑迷さと決別し、死を覚悟する。このとき彼は、バラッドに顕著な「死を素直に受容する精神」と向き合い、それを自己のものとしたのである。万感胸に迫っての彼の方言交じりの遺言は、読む者の心を打つ。

“MICHAEL HENCHARD'S WILL.

“That Elizabeth-Jane Farfrae be not told of my death, or made to grieve on account of me.

“& that I be not bury'd in consecrated ground.

“& that no sexton be asked to toll the bell.

“& that nobody is wished to see my dead body.

“& that no murners walk behind me at my funeral.

“& that no flours be planted on my grave.

“& that no man remember me.

“To this I put my name.

“MICHAEL HENCHARD.”

ハーディはこの遺言に、バラッドの常套的形式の“nuncupative will”「臨終口頭遺言」を取り入れたのではないだろうか。口頭で遺言される「形見分け」の中で、怨念の情の凄さが最も際立って「うた」われている代表的なバラッドに“Edward” (Child 13) がある。ストーリーの最後のクライマックスの場面で、息子 Edward に父親殺しの指図をしたのは実の母親であった、という恐ろしい事実が明かされる。“Edward” E 版の最終スタンザは次のように歌われ、Edward の口頭遺言は「地獄の呪いを母さんに！」という一点に凝縮されている。

“And what wul ye leive to your ain mither deir,
Edward, Edward?”

And what wul ye leive to your ain mither deir?
 My deir son, now tell me O.”
 “The curse of hell frae me sall ye beir,
 Mither, mither,
 The curse of hell frae me sall ye beir,
 Sic counseils ye gave to me O.” (25-29)

喜怒哀楽の情を極言まで削ぎ落として表現するのがバラッドの基本であり、当事者の感情は見事に抑制され、様式化された語り口をとる。「それを潜り抜けて最後に吐き出されるのは、簡潔な言葉の一点に凝縮された感情である。」(山中、『鑑賞』169) Henchard の遺言には、死を間際にした孤独と苦悩の中でさえ、哀れみと妥協を拒絶する彼の真の願いが凝縮されている。行間からは、運命はもう彼を、そして彼の存在すらもコントロールしないことが読み取れる。バラッドの臨終口頭遺言形式が意識的に受容されて、Henchard が演じきったこの悲劇的物語は幕を閉じる。

結び

The Mayor とバラッドの伝統を比較・検討するには、その定義、物語性、技法、様式、特性の全てに言及しなければならないが、本稿で取り上げたのは、その中の一部に過ぎない。物語性の中から“abrupt opening”、“ironical coincidence”、“nuncupative will”、技法の中から“changing or unchanging character”を含む“parallelism”、様式内の“Gothicism”から“folklore”の一要素である“ghost”について論証したが、他の要素は省略または概観に留めた。ハーディの作品の多くは、しばしば「バラッド的である」と指摘されるが、数編の詩を除いて、短編・長編小説それぞれの作品についての詳細な検討と評論は今日まで殆どなされていない。従って本稿では、*The Mayor* のストーリーの細部にまで言及して論考せざるを得なかった。

物語の冒頭で Henchard は、妻と幼い娘を連れ、職を求めて Weydon-

Priors をとぼとぼと歩いていた。そのとき彼が手にしていたのは、一枚の“ballad-sheet”であった。(ch. 1) ハーディの小説はその書き出しにテーマが隠されていることが多いが、*The Mayor* も例外ではない。この物語を“prose-ballad”に仕立てる構想を持っていたハーディが、序章の不気味な雰囲気と“a ballad-sheet”に込めた意図は明白である。物語の終盤で Henchard は、丘の上から Weydon-Priors を眺めながら、25年前のあのとき「“ballet-sheet”⁷を読んでいたこと」を思い出す。(ch. 44) すなわちハーディは、*The Mayor* の冒頭の“ballad”と終盤の“ballet”の間に「バラッド的世界」の物語を縦横に展開して、一編の literary “ballad”を“a sheet”に書き上げたと言えよう。

作品によって多少の例外はあるが、バラッドでは物語を客観的、劇的、悲劇的、抒情的、叙事（詩）的に「うたう」のが大きな特徴である。“A great tree in a wind” (ch. 19) と形容され、運命に雄々しく立ち向かった Henchard は、文字通り“heroic”で“tragic”な波乱万丈の“dramatic”な生涯を送った。一介の労働者から変貌を遂げた彼の最後の英雄的な姿は、近代の悲劇的物語とは異なる強い感動をもって、Shakespeare の Lear 王やギリシャ神話の Oedipus 王を思い起こさせる。これについて J. Brooks は次のようにコメントしている。“The plot owes some of its emotional force to the feeling that it is archetypal...Henchard is overtly or implicitly compared with Achilles, Ajax, Oedipus ... King Lear, and Faust.” (Brooks 199) ハーディによって普遍化された Henchard の姿は、人間の本质が古今東西大きくは変わらないことを「うたう」、バラッドの特質の一つと重なり合う。

Henchard は Farfrae の住む近代社会に安住できる人間ではなく、バラッドの原初的社會こそが相応しかつたが、皮肉にもそこに彼の悲劇があつた。*The Mayor* は、バラッドの物語手法の条件をほぼ満たして、一編の literary “prose-ballad”として「うた」われている。散文でありながら韻文の印象を

与える新しい形の“literary”バラッドを創作したハーディが“prose balladist” (Brown 115) と呼ばれる所以である。彼は *The Mayor* を脱稿した2日後の日記に、“April 19. The business of the poet and novelist is to show the sorriness underlying the grandest things, and the grandeur underlying the sorriest things.” (Hardy, F. E. 171) と記し、人間の不可避な哀しみと偉大さを紡ぎ出す作家の重要性を述べているが、バラッドの本質に通じるものがある。

ハーディとバラッドの伝統の密接な関係を D. Brown は、“Hardy’s imagination was nurtured in a tradition of balladry. His art as a storyteller is a balladist’s art, formal, social, rhetorical, working upon a stereotyped kind of narrative material.” (Brown 110) と解説している。さらに D. Davidson の次の一文は、まさに至言と思われる。“Hardy wrote as a ballad-maker would write if a ballad-maker were to have to write novels.” (Davidson 164)

付記

The Mayor のバラッド的世界を、バラッドの伝統と比較、対照しながら何項目かを例証したが、割愛した重要な項目がある。それはバラッドの「音楽性」であり、これは「物語性」と共に二大要素の一つである。*The Mayor* では、Farfrae が歌うバラッドや歌、祭り・市・行事いちなどの際のバンドの響き、バラッドの“refrain (chorus)”の役割を果たす“rustics”などが頻出するが、それらとプロットとの関係の論考は避けて通れない。筆者はこの手法を *Tess* に用いて論じたが⁸が、*The Mayor* については次の機会の「考察(2)」で論考する。ちなみに *The Mayor* の中で歌われるバラッドと歌は次の通りである。

- (1) “It’s hame, and it’s hame, hame fain would I be,
 Oh hame, hame, hame to my ain contree!
 There’s an eye that ever weeps, and a fair face will be fain,
 As I pass through Annan Water with my bonnie bands again;
 When the flower is in the bud, and the leaf upon the tree,
 The lark shall sing me hame to my ain countree!” (ch. 8)

- (2) “O Nannie” Title のみ。 (ch. 8)
- (3) “Auld Lang Syne” Title のみ。 (ch. 8)
- (4) “As I came in by my bower door,
As day was waxin’ wearie,
Oh wha came tripping down the stair
But bonnie Peg my dearie.” (ch. 8)
- (5) “As I came down through Cannobie” Title のみ。 (ch. 14)
- (6) “Miss M’Leod of Ayr” Title のみ。 (ch. 16)
- (7) “Lass of Gowrie”
“Tw—s on a s—m—r aftern—n,
A wee be—re the s—n w—nt d—n,
When Kitty wi’ a brow n—w g—wn
C—me ow’re the h—lls to Gowrie.” (ch. 24)
- (8) “Psalm the Hundred- and- Ninth” 4 sts. (ch. 33)
- (9) “‘And here’s a hand, my trusty fiere,
And gie’s a hand o’ thine.’” (ch. 38)

注

1. W. Caxton が1476年にイギリス最初の印刷所を開設して以来、“broad-sheet”「ブロード・シート」と呼ばれる片面刷りの大判紙に歌を印刷し、路上でうたい、売る、という新しいタイプのバラッドが生まれた。この大判紙の名前からこの種のバラッドを“broadside ballad”「ブロードサイド・バラッド」と呼んだ。口承バラッドが長い年月をかけて独特の様式化された物語形式を生み出したのに対して、こちらは政治的・社会的事件を文字に印刷してすぐに人々に伝える、というジャーナリスティックで教訓性に満ちたものであり、テキストとして固定された点が大きな違いである。しかし両者の交流は時代と場所の変化の中で錯綜し、両者をまとめて「伝承バラッド」と呼ぶ場合も多い。(山中、『詩学』2)
2. R. A. Firor の *Folkways in Thomas Hardy* によると、“wife sale”は、ハーディの時代にも実際に行われていて、当時の新聞にもたびたび掲載されていたそうである。例えば1889年5月11日付の *The Yorkshire Gazette* には、1シリングで売られた女が首に端綱をつけられて新しい夫の家に連れて行かれた記事が載っている。(Firor 237) “skimmity ride”については下記の注6で説明する。
3. 伝承バラッドの引用は、今日、我々がバラッドの定本としている次のChild版による。Child, Francis James ed. *The English and Scottish Popular Ballads*, 10

vols. Boston: Houghton Mifflin, 1882-98. これは19世紀後半に Child が、実に40年もの歳月をかけて蒐集したもので、バラッド305編が網羅的に収められている。しかし、この中にイングランド・スコットランド全てのバラッドが蒐集・編纂されている訳ではない。なお本稿で引用した作品名の後の番号は、上記の *ESPB* の中の番号を示す。

4. ハーディの作品に頻出する“ghost of the past”は、*Tess* の第33章の中で、この語が明記されている。
5. バラッドは、ハーディには幼少のころから身近な存在であった。収穫祭や祝い事などの際に村人たちは、楽器の演奏に合わせてバラッドを歌い、踊りながら楽しんでいた。ある収穫祭で聞いた伝承バラッド“Lady Isabel and the Elf-Knight” (Child 4)「イザベルと妖精の騎士」(Dorset 版では“The Outlandish Knight”)は、長いあいだ彼の脳裏に焼き付いていて、その時の印象を80歳を過ぎてバラッド詩“The Harvest Supper” (Circa 1850)に纏めている。Cf. 拙稿「“Lady Isabel and the Elf-Knight”と“The Harvest-Supper” (Circa 1850)」(日本バラッド協会ホームページ：研究ノート)
6. “Skimmington ride”とも呼ばれ、女房を寝とられた夫、不貞の妻(夫)を虐待する夫(妻)など社会的道徳の造反者の人形ひとがたを作って囃したてる嘲笑行列のことで、イングランドの田舎町では実際に行われていた風習である。S. Chewによると、これは17世紀の初めころに悪魔払いの一つとして発生したらしい。1882年に罰金または投獄刑が発令されたが止むことなく、1917年には警官が行列の群衆を解散させた記録がある。(Chew 113) *A Thomas Hardy Dictionary*によると、“skimmity”という語は、人形ひとがたをクリームなどを掬い取る柄杓で打ったことに由来するようだ。
7. 第1章では“ballad-sheet”となっているが、この第44章では“ballet-sheet”と表現されている。“Ballad”の語源は、ラテン語の“ballare” (to dance) である。もともとダンスに合わせて歌われた歌だったが、その後、ヨーロッパ各地で「うたい」継がれてきた多種多様な口承物語詩を指すようになった。Henchard が使った“ballet”は、*Scots Dictionary*によると、15世紀終わり頃から19世紀初め頃までは“ballad”を意味した、と記されている。現代英語の“ballet”は、文字通り舞踊の「バレエ」を意味するが、Dorset 地方では“ballad”の方言として“ballet”を使っていたと考えられる。
8. 近藤和子、「*Tess of the d'Urbervilles* の中のバラッド——全9編の研究——」、同志社女子大学英語英文学会 *Asphodel* 第45号、2010. pp. 94-109

引用文献

- Beach, Joseph Warren. *The Techniques of Thomas Hardy*. New York: Russell & Russell, 1962.
- Brooks, Jean R. *Thomas Hardy; The Poetic Structure*. London: Elek, 1971.
- Brown, Douglas. *Thomas Hardy* (2nd ed.). London: Longman, 1961.
- Carpenter, Richard. *Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1976.
- Chew, Samuel C. *Thomas Hardy*. New York: Russell & Russell, 1921.
- Child, Francis James, ed. *The English and Scottish Popular Ballads*, 10 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1882-98.
- Davidson, Donald. "The Traditional Basis of Thomas Hardy's Fiction", *Southern Review*, vol. 6. Boston: Louisiana UP, 1940.
- Firor, Ruth A. *Folkways in Thomas Hardy*. New York: Russell & Russell, 1968.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1965. (1st ed. 1928-30)
- Hardy, Thomas. *The Life and Death of the Mayor of Casterbridge*. London: Macmillan, 1966. (1st ed. 1886)
- Kittredge, George Lyman, ed. *English and Scottish Popular Ballads*. Boston: Houghton Mifflin, 1932.
- Laws, Jr., G. Malcolm. *The British Literary Ballad*. London and Amsterdam: Southern Illinois UP, 1972.
- Lewis, C. Day. *The Lyric Impulse*. Cambridge: Harvard UP, 1955.
- Pinion, F.B. *A Hardy Companion*. London: Macmillan, 1968.
- 福岡忠雄、『読み直すトマス・ハーディ』、京都：松籟社、2011。
- 山中光義、『バラッド鑑賞』、東京：開文社、1988。
- 、『バラッド詩学』、東京：音羽書房鶴見書店、2009。

参考文献

- Blunden, Edmund. *Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1942.
- Cecil, Lord David. *Hardy the Novelist*. London: Constable, 1946.
- Friedman, Albert B. *The Ballad Revival*. Chicago: Chicago UP, 1961.
- Gerould, Gordon H. *The Ballad of Tradition*. New York: Oxford UP, 1974. (originally published, 1957)
- Percy, Thomas, ed. *Reliques of Ancient English Poetry*, vol. 3. New York: Dover, 1966. (originally published, 1886)

バラッド研究会編訳、『全訳 チャイルド・バラッド』全3巻、東京：音羽書房鶴見書店、2005-06.

井出弘之、『ハーディ文学は何処から来たか』、東京：音羽書房鶴見書店、2009.

森松健介、『テキストたちの交響詩 トマス・ハーディ 14 の長編小説』、東京：中央大学出版部、2006.